

をさらに検討するために、関連植物の典型的な型を用い、栽培による自己増殖性の検討、国内各地においての生育地の調査、および減数分裂と核型の観察をおこなった。

その結果、1) オオイチゴツナギは正常な減数分裂をおこない、高い自己増殖性をもつこと、2) 核型において、①スズメノカタビラ、②ミゾイチゴツナギとヤマミゾイチゴツナギ、③オオイチゴツナギ、の3群は、それぞれ特異性をもつこと、が明らかになった。これらの結果は、オオイチゴツナギが独立種であることを示している。また、本研究で明らかにした各種の核型の特異性は、実際に各地でみつかったオオイチゴツナギとミゾイチゴツナギ、およびオオイチゴツナギとヤマミゾイチゴツナギのいわば中間的な形態の特徴をもつ植物の分類学的検討に利用し得るものである。

---

□Martin, B. (ed.): **Plant vacuoles** 562 pp. 1987. Plenum Press, New York. \$125. 1986年フランスのソフィアで行われた液胞に関するシンポジウムのまとめである。液胞はかつては老廃物の捨て場とか、膨圧によって植物体を保持するという程度の役割しか認識されていなかった。しかし最近では液胞がその膜面を介して、光合成をはじめ植物の生理活動に多くの重要な役割を果たしていることがわかってきており、このようなシンポジウムが行われるようになった。本書には68件の発表が記録されている。各報告は非常に細かい生理作用についてのものばかりで、直接に分類学に関与するものは見当たらないが、古い認識を改めるのに役立つ。それよりも序文の中で「菌類と植物」という表現がなされていて、生物界のこういう分け方が進みつつあることを感ずる。(金井弘夫)

□東京都目黒区(編): **街の自然12か月 資料編 目黒区産動植物目録** 80 pp. 1985. 東京都目黒区役所. 新刊としてはやや遅いが、訂正すべき箇所があり、またサンケイ児童出版文化賞を受賞した資料集でもあるので、あえて紹介したい。本書は、先に発行された「街の自然12か月 めぐろの動植物ガイド」の資料集で主にシダ植物、種子植物、昆虫、鳥類の目録を収めている。目黒区は面積約 14 km<sup>2</sup>、緑地率約 11% で、植物目録の種数は植栽種も含めて716種、その内、自生種と帰化種のみでは401種、帰化率は約26%である。カンアオイ属は前川文夫が同定し、ヒメカンアオイ *Asarum takaoi* F. Maekawa のみが「稀 野生化」として記録されている。しかし、その種名をコバノカンアオイ *Heterotropa variegata* (A. Braun et Bouché) F. Maekawa に訂正する。前川文夫が現地調査した時点で、その個体は葉が円腎形、凹頭、長柄という本種の特徴を有していたが、1個体のみのため採集しなかった。その同定結果は私が手紙で伝えたが、何らかの手違いにより、この記録ミスが生じたようである。なお、その後その個体は標本に作成され、目黒区役所が保管している。(前川由己)